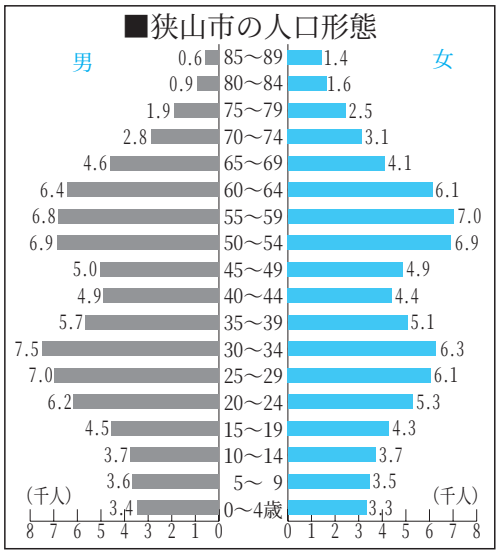
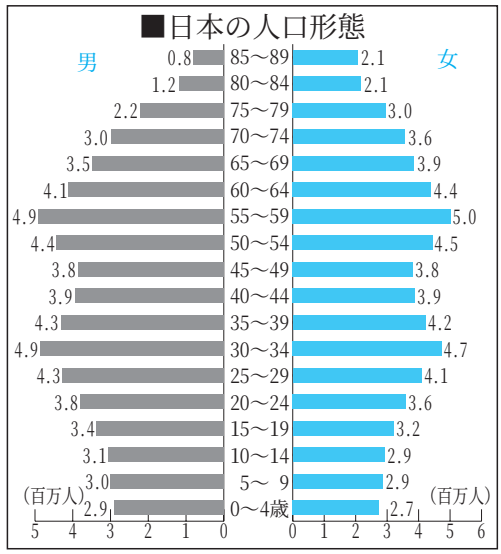
2007年問題を考える

会社人間が地域に戻ってくる

2007年、家庭や地域よりも仕事に没頭し、「企業戦士」と言われた約700万人の「団塊の世代」(昭和22年～24年生まれ)が、一斉に定年退職を迎えます。そして、これによって生じるであろう大きな社会変化が懸念されています。そこで今月は、すぐそこに迫っている2007年を前に、さまざまな知識や経験を持った皆さんの狭山市を舞台とした新たな人生の過ごし方を一緒に考えてみましょう。





【人口ピラミッド】
狭山市と日本の人口形態はほぼ同じ形を成している

団塊の世代は総人口の約6％

2007年問題ってなに？

現在、日本の人口グラフは、30～34歳が一つの山、そして、その親の世代の55～59歳がもう一つの山を作っています。2007年問題は、この世代が定年退職を迎える時期に起こる、日本の社会構造上の問題をさまざまな形でとらえているものです。大量リタイアで発生するGDP（国内総生産）の減少や年金負担の増大、技術の空洞化などの経済的な影響、そして、いわゆる「会社人間の地域デビュー」が挙げられます。

日本の人口のうち65歳以上人口は2千532万人、約20％です。そして55～59歳人口は約8％、999万人です。この世代が65歳以上となる10年後には、日本人の26％が65歳以上になるとの見方があります（国立社会保障・人口問題研究所）。

生きがいを失わないために…

「仕事一筋」の団塊の世代。退職することで目標を失い、生きがいがなくなってしまったように感じる方がいるかもしれません。そんなとき、本人、そして「会社人間」を迎える家族はどうしたらよいのでしょうか。

高い意識　シニア世代のふるさと感

今、市内で活躍中のシニア世代には、地方から進学・就職などで首都圏に出てきて狭山市に住み始め、定年退職をした後も故郷へは帰らずに、「狭山を終の棲家にしよう」と考えている方が多く見受けられます。また、7月に行った市民意識調査では、62・4％の方が、「住みやすい・どちらかというと住みやすい」とし、83・4％の方が狭山市は「住むところ」と回答しています。また、居住年数が長いほど市政への関心が高くなる傾向がありました。

このことから、狭山市は「寝るために帰ってくるベットタウン」から、「暮らすまち」へと変わってきていると考えられます。こういった狭山市に根付こうと考えている皆さんは、特に「狭山のまちを再発見し、このまちをよくしよう」という意識が強く働いているようです。

皆さんの中に芽生えてきた「ふるさとへの愛着」が、まちを動かす原動力となりつつあります。

私のふるさとは狭山市です

古賀章生さん
（中央在住）

私は、昭和51年に東京都から狭山市に引っ越してきました。理由は「緑が多かったから」と単純でいずれは生まれ故郷に帰るつもりでいました。そんな気持ちが変わったのは、故郷での同窓会に参加してからです。なぜ、狭山を「終の棲家」にしようと決めたのか…。それは、「人とのつながり、人の輪」を考えての結論でした。幼いころの仲間も大切ですが、振り返ってみると、狭山市に住んでから少しずつ増えた仲間のほうが、付き合いが長く深かったのです。

こうして、狭山市で生涯暮らすことを決め、さまざまな情報収集に動いていると、狭山市のよいところや悪いところが見えてきました。公民館のサークル情報は、市内全域で一元化したものがなく、とても不便さを感じました。そこで、市民の活動団体をまとめた冊子を作ってみると好評で、「自分が地域の方の役に立ったのだ」と思うとうれしくなりました。自分のためにしたことが、結果として地域の方の力になれた…こうした積み重ねで、私に狭山市への「ふるさと」としての愛着が湧いてきたのです。